

カルチャーショック

学習の定期預金

TAKANO KUNIO
高野 邦雄

この9月にヨーロッパ解剖学会で研究発表する機会を得た。出発に先立ち、発表する内容をいかに格好良く話すか、普段あまり使わない単語を辞書で調べてストーリーを考えた。ところが、いざ発表が始まると新しく覚えた単語は頭の中から消えてしまっていた。結局、昔に記憶していた単語のみで発表した。学習によって獲得した記憶は、大脳の中の側頭葉に普通預金される。普通預金された記憶は長い間使わないといつの間にか消えてしまう。しかし、繰り返し再生し学習すると定期預金に振り替えられる。定期預金された記憶は、ある種のタンパク質として蓄えられ、なかなか消えることが無い。定期預金する能力は若い時ほど高く多くの学習成果を蓄えることができる。

記憶の機序はこんな単純なものではなく広く脳全体が関与していると考えられているが、ハードウェアである神経回路とホルモンなどの物質がソフトウェアとなり相互に作用することにより成り立っているようだ。神経回路は、神経細胞がたがいに連絡しあって形成されるが、記憶はある神経細胞に刺激が加わると、その刺激はつぎつぎと別の神経細胞に情報として伝達し、回路が回り出し、何回も回路を回すことにより定着されると考えられている。しかし、記憶の定着過程にはある種のタンパク合成などの物質的な作用も必要であるといわれる。ハードウェアである神経回路の形成は若い年齢時に完成し徐々に消失する。ある中枢は4歳ごろから機能が失われるといわれる。したがって、若い時代にできるだけ多くの神経回路を造るべく普通預金をし、定期預金としての多くの知識を蓄えなければならぬ。中年以降は、これらの定期預金をときどき出し入れしながら大切に利用することになる。頭に白いものが混じってから新しく多くの学習の定期預金をすることは大変な努力を必要とする。多くの中年以降の人は、「若い時にもっと定期預金をしておけば良かったなあ」と後悔していることだろう。若い皆さんは羨ましい、我々、中年の何倍もの定期預金をする能力を持っているのだから……。

(留学生指導主事・歯学部教授)

連載第7回



(95年ヨーロッパ解剖学会にて前列中央が著者)

さて、どう生きようか

ICHIKAWA HISASHI
市川 寿

田河水泡さんという漫画家をご存じだろうか。「のらくろ」の作者である。もう7年にもなるだろうか。あぐらをかいて座った蛙が手を振る姿を書き残し、まもなく92歳で生涯を閉じた。水泡さんは、漫画を書き始めた頃から作品に記す名前の脇におたまじゃくしの絵を添えていたのだそう。のらくろが大評判になった後、書き添えられるおたまじゃくしには後足がはえた。そしてようやく蛙の姿。漫画家としてのご自分の一生を長いスパンで捉え、歩まれた。

若い世代にとって、人との交流は、生き方を学ぶという意味において、より貴重である。今の皆さんには自分のこれからの方向性を見いだしてゆけるような人々との出会いや付き合いがとても大切に思えていることだろう。時間の軸に沿って生活をこうしてゆこうと夢を描くことは意外に難しい。けれども、今、この瞬間に併存している多様な生活を知ることにはできるし、現代はその範囲をたやすく広げることができる恵まれた時代でもある。海外にもどんどん目をむけたらよいと思う。鈍感になっている自分に、ショック療法のよう

な効果をもたらすかもしれない。

アメリカは民族のモザイク国家であると言われる。実際、出身民族系ごとにはっきりしたコミュニティーができています。民族習慣には深い背景があり、自分たちの生活を守ってくれるものでもあるから、習慣を捨てたり異民族が錯綜した環境の中で恒常的に付き合いゆくことはストレスも多いからだろう。しかし、異なった民族同志がお互いを理解してうまくやってゆくということは、主張と交渉の積み重ねであると言ってよく、とにかく骨の折れる作業である。それが国の意識として一つにまでまとまって行くのは驚きだが、フロンティア精神を持った人々の集まりだからこそできるのかもしれない。世代が進むごとに、ゆっくりとアメリカ民族と言いつつあるものがある。しかし、今は言ってみればインターインディビジュアルな状況である。個が大切であり、主張できる自分が有る事が必須である。それは、幼少の時からしっか

りと訓練される。そのかわりに沈黙は最悪の状態であり、常にしゃべりつづけていなくてはならない。

ひるがえって、日本では若者のモラトリアム傾向が指摘されて久しい。なかなか自分を主張できないのである。けれども、私はそれでも心配してはいない。

佐賀県の唐津市に西岡小十さんという78歳になる陶芸家がおられる。戦後、古い唐津焼の陶片に接する機会を重ねるうち、その美に気付いた。57歳にして古唐津復元を決意し、登り窯を築いて努力され、小さな陶片だけを頼りにご子息と共に幾つもの技法を再現した。本歌を凌ぐ作品は驚きをもって迎えられる。そして、その成果を秘すこと無く、求めに応じ惜しみなく教え語る。今、まさに唐津焼の研究所である。陶芸を生業とする人々への有形無形の影響は計りしれないという。「物の価値がわかるようになった時、初めて自分の仕事が決まった。」と静かにおっしゃる言葉が重い。

(水産学部助教授)

私の日本人論 (第7回)

留学生との触れあいの中で

ARIYOSHI TOSHIHIKO
有吉 敏彦

家族と一緒に外国で暮すときに問題となることは、その国の言葉と住居であることは言うまでもない。食は知恵を働かせば何とかなるものである。外国で生活するとなると誰でも多少ともその国の言葉を学んでくるであろう。ところが、日本に来る留学生の中には全く日本語を喋れないし理解しないものもある。その気持は理解できないこともない。善意に解釈すれば先進国の一員であり、世界中に日本製品が出廻っている中で、英語が喋れ理解できればそれで十分と想っていることであろう。しかし家族ともどもの自分のドイツ留学のときを考えてみれば、世界の共通語といわれる英語だけで、食べること、着ること、住むこと日常生活に関するあらゆる面で、接触する大多数の人々と意志の疎通がうまくできるはずもない。ましてや日本の物価は驚く程高い。家も狭くプライバシーさえも守れないのが普通であろう。金銭的にも余裕のない留学生であれば家族を抱えて強いストレスと不満が生ずることは当然かもしれない。特に留学生とよく接触する人の中に、人の心の痛みが判らぬ者がいれば尚更のことで反日感情さえも抱きかねない。



(私の家族と留学生)

では解決策はあるのかと問いかけられれば頭を抱えざるをえない。しかし隣国では縁もゆかりもない子供達を50年も育ててくれた人達もいる。要はおおらかな愛、やさしさであろうか。

些細なことかもしれないが、ホームビジット・ホームステイも相互理解の一助であり、留学生自身による自国紹介、自国語講座の開催や、地域住民や団体による地方への招待、村落生活での触れあい体験も、地道ではあるが留学生支援である。長崎クランチや精霊流しも伝統的日本文化の教育の場であり、わが国の自然の姿である。宗教や社会制度、人種が違う留学生だからこそ多様な価値感があり個性がある。

価値感の違い個性の多様性があっても、食事会の食事当番が、カレー、シチュー、おでんなど食事の献立を考えるとき以外は、「ヨソの国の人」として考えたことがないという研究室の若い諸君の自然体に接したとき、私は心が安まる気がする。

(外国人留学生指導センター長・薬学部教授)